

■ Gauss の消去法

枢軸選択付き Gauss の消去法のアルゴリズム

【前進消去】

```

for k := 1 to n - 1 {
  |A[i, k]| (k ≤ i ≤ n) を最大にする i を探す (※)
  b[i] と b[k] を交換 (※)
  for j := k to n { A[i, j] と A[k, j] を交換 } (※)
  w := 1/A[k, k]
  for i := k + 1 to n {
    M[i, k] := A[i, k] × w
    for j := k + 1 to n {
      A[i, j] = A[i, j] - M[i, k] × A[k, j]
    }
    b[i] := b[i] - M[i, k] × b[k]
  }
}
    
```

【後退代入】

```

for i := n to 1 {
  x[i] := (b[i] - ∑j=i+1n A[i, j] × x[j])/A[i, i]
}
    
```

注意：実際には、 $M[i, k]$  は  $A[i, k]$  に上書きするか（→ LU 分解），あるいは単に変数  $m$  として持ち保存しない。また後退代入時はわざわざ  $\mathbf{x}$  をとらず  $\mathbf{b}$  に書き込むのが通例。（つまりこの手続きを呼び出すと、行列  $A$ ，ベクトル  $\mathbf{b}$  は破壊され、代わりに  $\mathbf{b}$  に解が入る。）枢軸選択なしの場合は（※）部分を削除。

LU 分解のアルゴリズム

```

for i := 1 to n { p[i] := i }
for k := 1 to n - 1 {
  |A[i, k]| (k ≤ i ≤ n) を最大にする i を探す
  p[i] と p[k] を交換
  for j := 1 to n { A[i, j] と A[k, j] を交換 }
  w := 1/A[k, k]
  for i := k + 1 to n {
    A[i, k] := A[i, k] × w
    for j := k + 1 to n {
      A[i, j] = A[i, j] - A[i, k] × A[k, j]
    }
  }
}
}
    
```

注意：行列  $A$  と空のベクトル  $\mathbf{p}$  を渡すと、 $A$  に LU 分解形が上書きされ、 $\mathbf{p}$  に行交換情報が入る。

## ■ベクトルと行列のノルム

線形空間  $X$  の要素  $x$  に実数  $\|x\|$  が対応し、次の4つの条件を満たすとき、 $\|x\|$  を「ノルム」と呼ぶ：  
 (i)  $\|x\| \geq 0$ , (ii)  $\|ax\| = |a|\|x\|$  ( $a \in \mathbb{C}$ ), (iii)  $\|x\| = 0 \Leftrightarrow x = 0$ , (iv)  $\|x + y\| \leq \|x\| + \|y\|$  ( $y \in X$ ).

以下、 $p \in \{1, 2, \dots, \infty\}$  とする.

ベクトルのノルム： $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^n$  に対して、 $\|\mathbf{x}\|_p = (|x_1|^p + |x_2|^p + \dots + |x_n|^p)^{1/p}$ .

行列のノルム： $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$  に対して、 $\|A\|_p = \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|A\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p}$ .

このように定義された行列のノルムは、特に  $p = 1, 2, \infty$  の場合に、以下の等式を満たす.

**定理 1**  $\|A\|_1 = \max_{1 \leq j \leq n} \sum_{i=1}^n |a_{ij}|$  (最大列和),  $\|A\|_\infty = \max_{1 \leq i \leq n} \sum_{j=1}^n |a_{ij}|$  (最大行和),

$\|A\|_2 = \sqrt{\rho(A^T A)}$  ( $\rho(B)$  は行列  $B$  のスペクトル半径).

(証明) 略. 講義で紹介した参考書を参照. □

次の不等式はよく用いられる.

**定理 2**  $\|A\mathbf{x}\|_p \leq \|A\|_p \|\mathbf{x}\|_p$ ,  $\|AB\|_p \leq \|A\|_p \|B\|_p$  (「劣乗法性」;  $p = 1, 2, \dots, \infty$ ).

(証明) 定義より、任意の  $\mathbf{x}$  に対して

$$\|A\|_p = \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|A\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p} \geq \frac{\|A\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p}.$$

1 番目の不等式はこれから明らか. 2 番目の不等式は,

$$\|AB\|_p = \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|AB\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p} \leq \|A\|_p \sup_{\mathbf{x} \neq 0} \frac{\|B\mathbf{x}\|_p}{\|\mathbf{x}\|_p}$$

から得られる. ただし、ここで1番目の不等式を使った. □

注意：行列のノルムは、上の他に Frobenius ノルム

$$\|A\|_F := \sqrt{\sum_{i,j=1}^N |a_{ij}|^2}$$

もよく使われる. このノルムも劣乗法性を満たす.

【演習】(自分の興味に従って自習し、理解・実装力を高めることを奨励する)

1. 行列のノルムについて定理 1 を示せ. また Frobenius ノルムも劣乗法的であることを示せ.
2. 複数のノルム間には様々な性質が成立する. 例えば  $\|A\|_\infty/n \leq \|A\|_1 \leq n\|A\|_\infty$ . これを示せ. (cf. 有限次元ノルムの同値性).
3. Gauss の消去法を  $n$  次の連立一次方程式に適用した際の計算量 (四則演算それぞれ) を精密に見積もってみよ. (この種の計算は一度やっておくとその後の参考となる.)
4. MATLAB, Python (+numpy) 等, 自分に適した環境で, 種々行列演算を行ってみよ (行列の定義, 演算, 連立一次方程式の求解等).